

# ひかりのこ

6月園便り

聖ミカエル幼稚園  
2014年5月23日

## 『食べること』

私は最近『日本教育新聞』をよく読むのですが、(夫が定期購読をしているので)、保育のコーナーの、玉川准教授の大豆生田啓友(おおまめうだ ひろとも)先生の連載を楽しみにしています。今回は『ぐりとぐら』の絵本のあの有名な歌について載っていました。「ぼくらのなまえはぐりとぐら このよでいちばんすきなのはおりょうりすること たべること ぐり ぐら ぐり ぐら」この歌はそれぞれの幼稚園や保育園や各家庭でそれぞれいろいろにメロディーがつけられて読まれ、愛されている、という内容でした。そういえば、私も勝手に節をつけてわが子に歌ったものです。園長になって、運動会の応援団の「ガンバリまん」とあまりにもメロディーが同じで、「あれっ」とびっくりしましたが、食べ物が出てくる絵本でいうと、我が家で一番人気があったのは『ぐりとぐら』よりも『白クマちゃんのホットケーキ』です。子ども達に何度も何度も「読んで!」とせがまれました。また私の世代はなんといっても『ちびくろさんぼ』で虎がバターになってしまい、それで沢山ホットケーキを焼いて食べるシーン。つばをこっくんとしたものです。子どもは食べることが大好き。だから食べ物の出てくる絵本も人気があるんですね。

そしてやっぱりお母さんのごはんが大好き、のはずです。でも私は子供時代、特に中学生ぐらいから母の作るお弁当があまり好きではありませんでした。だって、私のお弁当ときたら、男の人が持つような大きな保温弁当箱。おかず入れを開けると中には鮭の塩焼きときんぴらごぼうと、煮豆。いろいろが今一つ。時々生協の魚肉ウインナー。これもいろいろが…。ホカホカのごはん入れを開けると、びっしり玄米ご飯が。周りの女の子たちのかわいらしいお弁当箱と真っ赤なウインナーや色とりどりの冷凍食品と真っ白いごはんがどんなに羨ましかったことか! 時には手作り餃子のサンドイッチ! こっそり隠しながら食べたものです。

でも、母親になってから、「ああ、あれは母の愛情たっぷりのお弁当だったんだなあ」と思うようになりました。煮豆だって、きんぴらごぼうだって、今自分で作るとなると結構手間と時間がかかります。真っ赤なウインナーをほとんど食べないで育ったことにも今となっては感謝です。玄米を毎日食べていたことも今の健康な体につながっているのかもしれない。「たとえ一食でも汚染のない食べ物を」これは昔、確か生協のたまねぎの箱に印刷されていた言葉だったと思います。

今わが子に食べさせている食物が体にどんな影響を及ぼすのか、その結果が表れるのは50年も60年も先のこともかもしれません。だからこそ、親は「一食だけでも」という気持ちで子どもに少しでも良い食べ物を与えていかなくてはいけないのだと思います。添加物や農薬の心配のある食べ物は小さなお子さんにはできるだけ避けていただきたいと思います。

園長 渡部良子

## 月主題：おもしろい

- ・遊びを楽しむ中で、自分の気持ちを伝えようとする
- ・身近な自然・生き物や様々な素材にふれる
- ・聖書の話やさんびかに親しむ

## キリスト教保育

聖書、とりわけイエス・キリストの言葉と行いが記録された「福音書」には、私たち人間とイエスとは、羊と羊飼いの関係に喩えられています。草の少ないパレスチナの荒れ地で羊を飼うのは大変なことでした。羊飼いは命がけで外敵から羊を守り、新鮮な青草と水の豊富な土地を求めて移動します。夜は安全な囲いの中に入れ、昼は連れ出して食べものを求めるのです。

安全を第一に考えれば、極力、羊たちは囲いの中にいて、食べものは羊飼いが運んでくる方がよいでしょう。しかし、それでは運動にならず、羊の成長と生きる力が養われません。そこで羊飼いは危険を冒しても羊を外に連れ出し、守るのです。

幼稚園のこどもたちの姿を見てこの聖書の箇所を思い出します。新年度が始まって2ヶ月ほどになりますが、特に新入園の3歳のお友だちは、大分慣れてきたようです。いつもの光景ですが、入園当初は不安で涙が流れました。送って来られたお母さんやバスに乗せるお母さんも、泣く我が子を見て忍びない思いだったことでしょう。しかし、お母さんがこどもを、それこそ「囲いの外」に連れ出さなければその子の成長はありません。時間が経ってこどもたちが泣かなくなるのは、もちろん、幼稚園の環境に慣れて安心感があるからなのですが、それ以上に、たとえ自分がお母さんのもとを離れたとしても、しっかりとお母さんと繋がっているという感覚が芽生えているからだだと思います。物理的には別の場所にいたとしても、お母さんの愛の中に置かれているということ、こどもたちは信じているのです。

私たち大人もまた、神さまのこどもです。人間として成熟するために、神は私たちを外に連れ出します。いろいろな危険があっても、外に出て成長することを願っておられるのです。そして、私たちがどんな場所に置かれたとしても、羊飼いであるイエスが自分の命を投げ出して、私たちを守って下さいます。

チャブレン 司祭 下澤 昌